

事例 2 : 介護衣 (つなぎ服)

対象者の状況

- ⇒ 54歳、男性 要介護度5、寝たきり度C2、認知症高齢者の日常生活自立度 b
- ⇒ 脳梗塞後遺症による失語症のため、意思疎通が困難であった。

身体拘束の状況

おむつはずしをすることから、介護衣 (つなぎ服) を着ていた。

対応方法の検討

問題となる行為はおむつはずしのみであり、しかも、おむつが汚れている時にだけ、おむつはずしの行為が現れていた。おむつの汚れによる不快感が、おむつはずしの原因と考え、不快感を取り除く必要があると判断し、排尿のパターンを知ることとした。

対 応

介護衣をやめてパジャマに着替え、排尿パターンを知るために、毎日2時間ごとに、おむつの状態を確認し、おむつの汚れがあるか、おむつはずしの行為があったかなどを記録に取っていった。

このような記録を1週間ほど続けていくことで、大まかな排尿パターンを知ることができた。

排尿パターンに従い、排尿後にオムツ交換ができるよう、オムツ交換の時間を変更し、現在、1日6回程度のオムツ交換を行っている。

経 過

不快感が消失し、オムツはずしもしなくなった。他の利用者に比べ、オムツ交換の回数が多く、それだけ職員の負担も増えることとなるが、職員にとっては、オムツ交換の負担よりも、介護衣をやめパジャマに着替えることができたという喜びの方が大きい。

【着眼点 (ポイント)】

排尿のパターンを知るためには、手間や時間をかけることが必要である。

労力がかかるが、利用者の方の快適性を追求したケアが実践された事例である。